

薰園作



伶人

薰園作

短歌研究會發行



短歌研究會發行

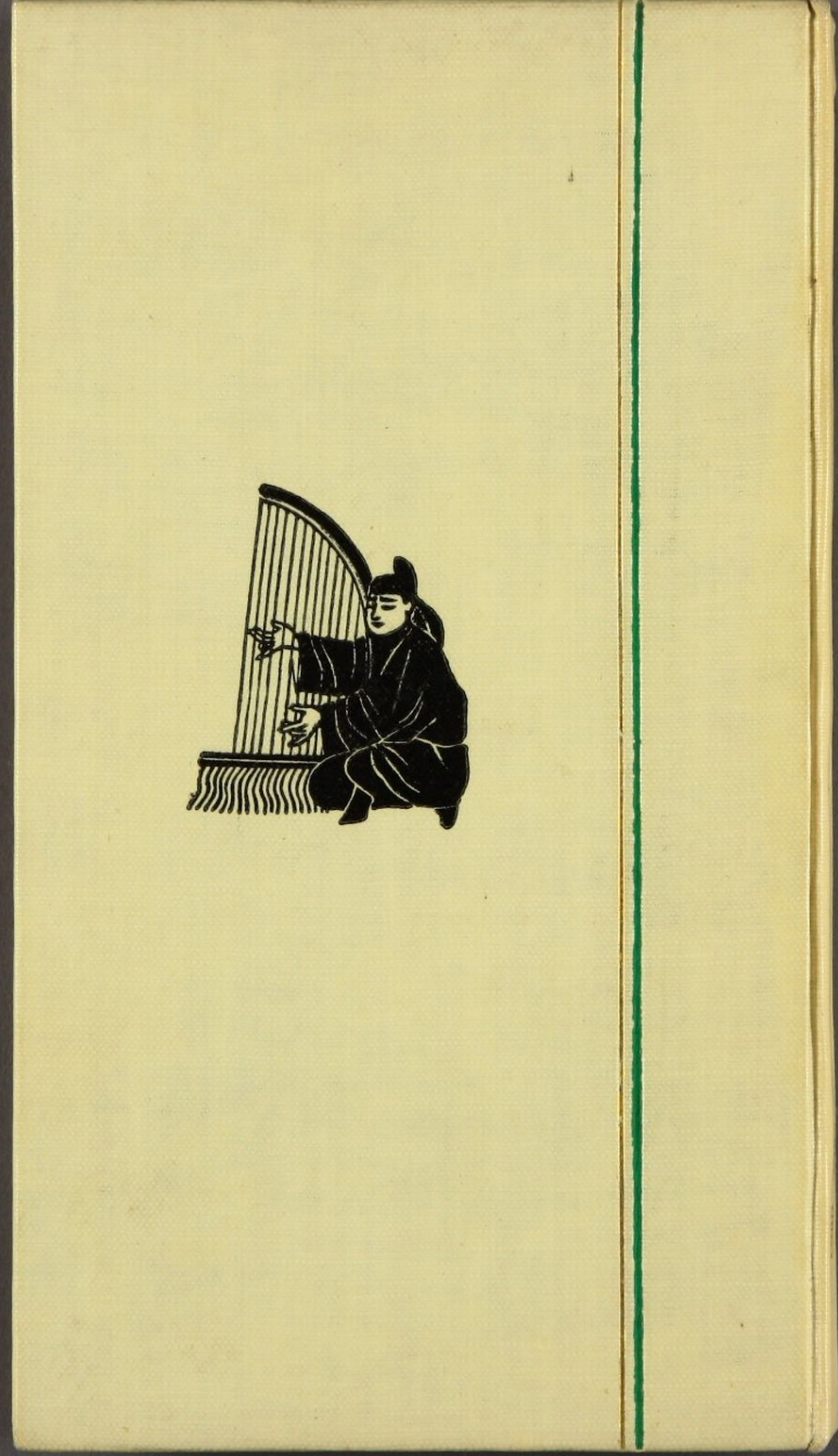
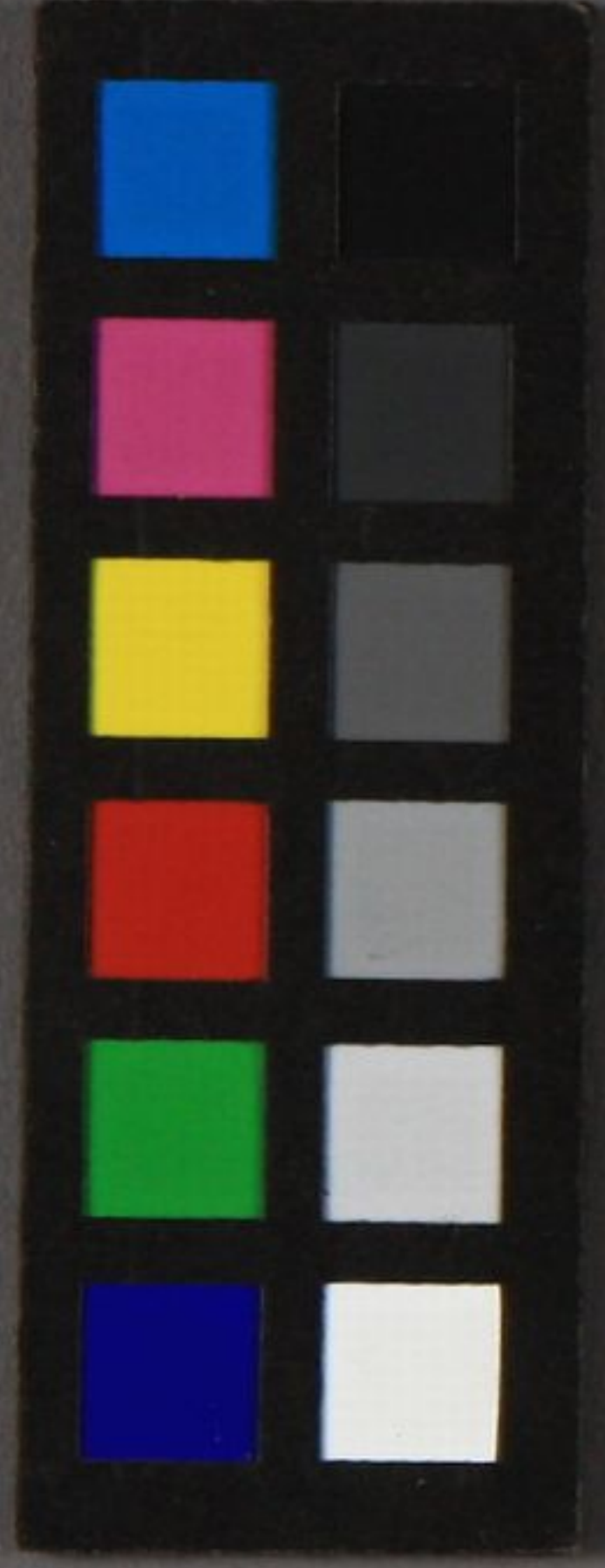
伶人

薰園作



薰園作

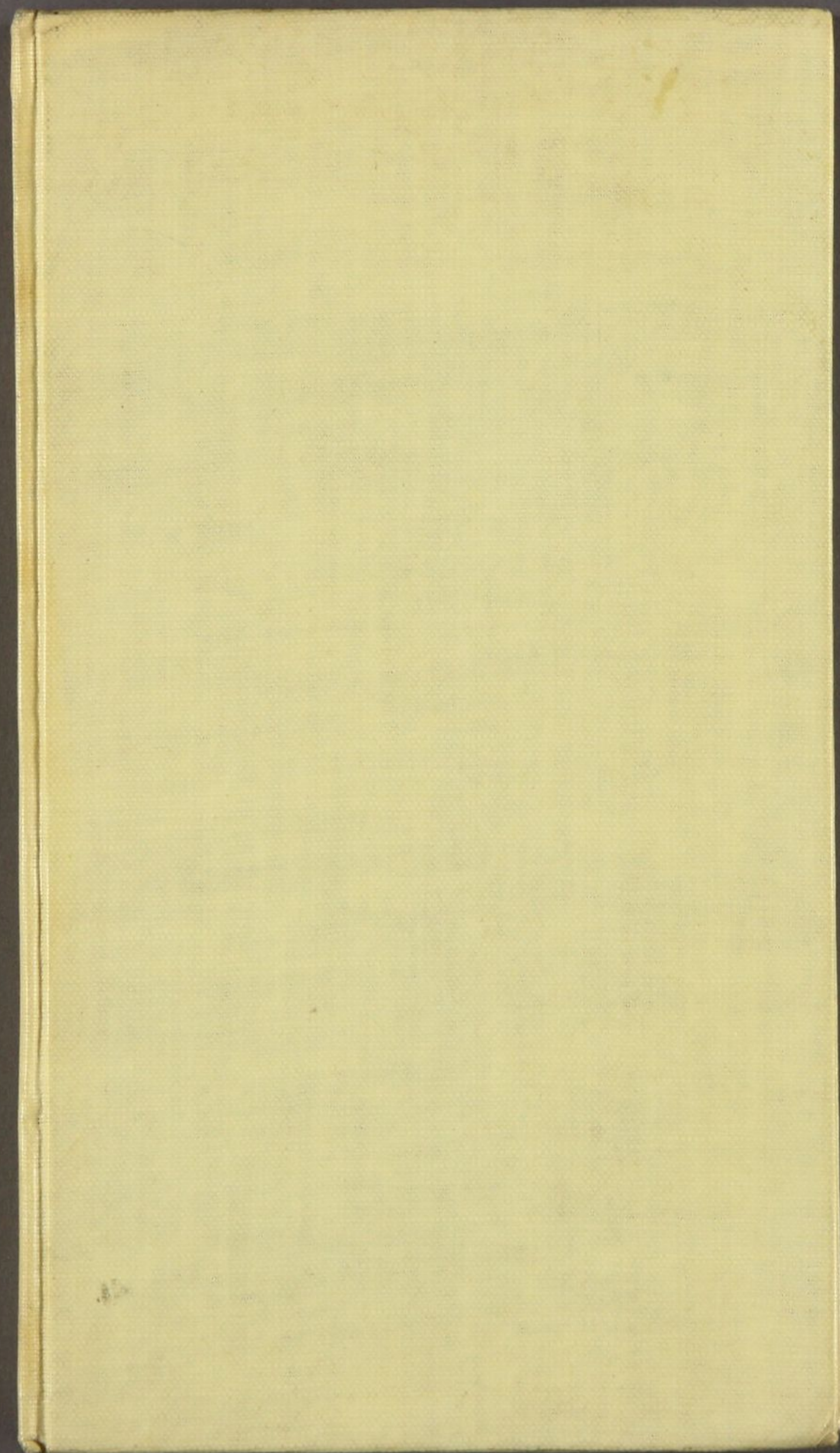




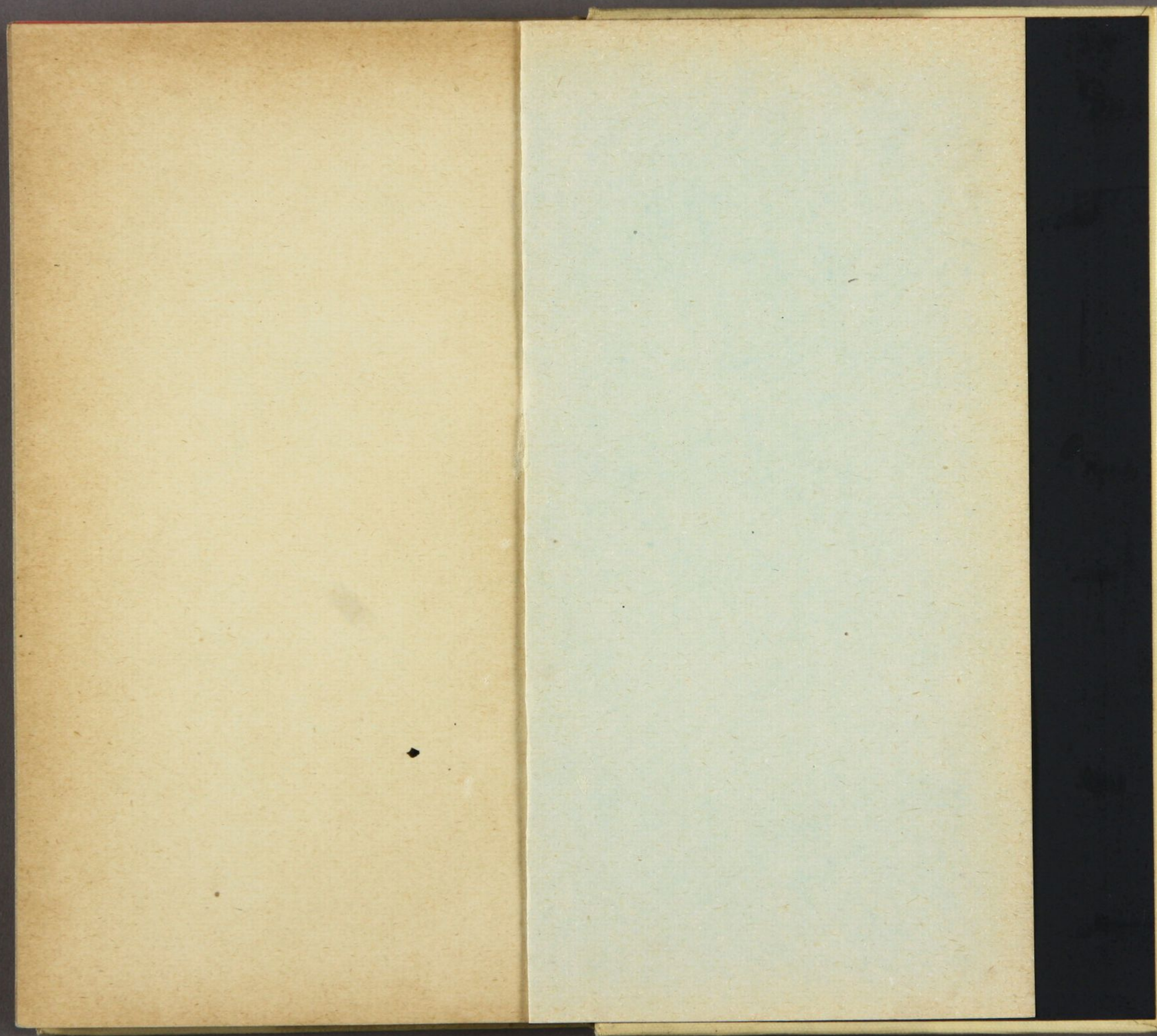
卷之二



金少叢園







伶人

金子薰園





わが第二の詩集『小詩國』以後の歌稿中より、選抜補正したる者に、わが白菊會同人の作を添へて、此一巻を成せり。

装釘意匠は、結城素明氏の考案に成り、口繪「ヴェニス」の小伶人は、川村清雄氏の描く所。その手にせるは、伊太利特有の樂器にて、「オカリナ」(Ocarina)と稱し、氏が往年彼地より携へ歸られたる者。氏は時々吹奏して、曾遊の跡、懐しさに堪へずといふ。

明治卅九年春三月

著者



わが第二の詩集『小詩園』以後の歌稿中より、選抜補正したる者に、わが白菊會同人の作を添へて、此一巻を成せり。

装釘意匠は、結城素明氏の考案に成り、日繪「ヴェニス」の小伶人は、川村清雄氏の描く所。その手にせるは、伊太利特有の樂器にて、「オカリナ」(Ocarina)と稱し、氏が往年彼地より携へ歸られたる者。氏は時々吹奏して、曾遊の跡、懐しさに堪へずといふ。

明治廿九年春三月

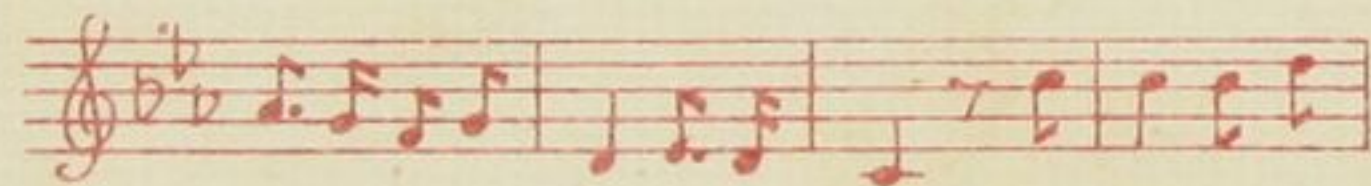
著者



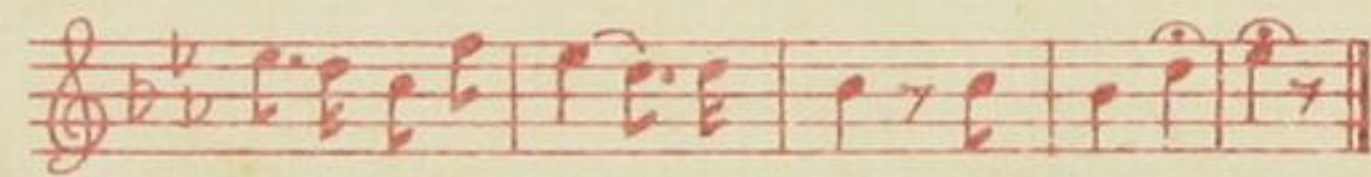
伶人



はる—くさの あめにち



ひさきふ えぬら しわがあふ



くこもあれ—なと ともふひ

小林愛雄曲



伶人

薰園作

春草はるくさの雨あめに小ちひさきさき笛ふエぬらしわが詩うた吹く子もあ
れなと思ふ日

丘たかにたちて呼よべば帆ふねの人舟ふね縁はたに遠とほきわれ見る
秋晴あき はれにして

雪崩なだれの日峽かひより峽かひに巢かごもりの深山みやまうぐひす
みな啼なきたちぬ

落葉らくえふの詩うたの國くにをらす女君めづみがほ反古はんこのつくゑの
冬薔薇ふゆばらの花

わがおもひ君きみが思おもひと逢あはひ夜よは旦あけをさく花紅べに
おほからむ

九月ぐわつ罽草がやの家やなれば晝も吊りてのこる夏書げきに
蟋蟀こほろぎきくも

ひぐらしの啼きやむくれは人戀しなき人戀し
裏うらの小林こばやし

青潮あせに白帆じほあけたる島の日や鷗かもめとなりていつ
かへるべき

宵月よひづきは森にかくれて花摘むとわがうつむきし
野は闇となる

山雀やまがらよ餌挽車ゑひきぐるまをひきさしてをかしと見ずや紅
梅の花

黄銀杏きいでんぎょうの雨に染みたる時雨傘二つわかれし六
本木ほんぎかな

夏山なつやまのみどり迫れる水樓すゐろうに紹蚊帳せうがやはづせば晝
ほとゝぎす

美酒うまざけに君と酔よひたる頬ほのほてりよき頬ほのほて
り風に吹かせじ

天あめの母ははの足たらし乳ちなしてくれなるの薔は薇らのわ
か芽こゝろに春雨はるのふる

わか草くさに残ごん雪せつあはき牧場まきばみち林檎りんごつみくる車くるま
に逢あひぬ

水みづ遠とほくおおかりな鳴なれば扉とに出いで、花はな蔦つたかざす
べいにず少女しょうにょよ

いちご賣う優やさしきこゑにさみどりの窓まどの晝ひる寢いの
人ひとさましつる

萩きけば母かとおもひ蘭らんきけば祖母おばとおもふ
秋かぜの家

君まさばかゝるさまして灯ひやいとふ若ら玉椿
花さゆらぎぬ

ゆく春や薄うす日影ひさすあみ竹の小縁こえんにうつる金
雀枝にしだの花

ほゝけては銀色ぎんしきなせる穂すゝきにおなじ色な
る朝時雨すも

冬姫のうで環ほつれて憂々と地に珠ゆれば水
仙さくも

無花果のもり日に玻璃の紙屏はふ鼯鼠の詩に
小さき秋

わが胸は夏野のいづみ水かれて花影さゝぬ歌
の鼓子花

この宵を君や静思のひと時とふと見る瓶の花
さきあへぬ

藤蔓や秋くれはやき山の扉とに小手こてかざし見る
夕ゆふわたり鳥どり

むさし野の朝露あさつゆのこる蓼れいの穂ほに秋かげろふや
晝ひるの多摩川

草の戸にけさ白衣あらいのけはひしてゆふべを人に
秋おとづれぬ

紫陽花あじさの若わかけみに入りてこぼれ日ひのさびしき
夏を歌にひろはむ

花蔦や薄日壁はふ夕城の窓にほのめく騎士が
ふる戀

ほとゝぎす灯ともしごろの欄を過ぎて雨雲暗
き湖上に消えぬ

われ醜女冬花飾して元朝をあざみし人の門過
ぎて見む

まどろめば夢の扉をうつすがれ葉の葉音葉音
や詩の句練る夜と

あやめ舟呼聲かろう棹よせぬ幟たつなる川下
の家

繪蠟燭窓にかざしてさくら見る人の好事にお
ぼろ月かな

笛吹けばきのふの曲を秘めてよるうぐひす汝
も春の伶人

遊蝶花小窓にすゑて蝶待たむ金翅の蝶や君載
せくらし

(蘭舟千のなき小弟を志のびて)

湖みづうみの秋をたゞよふまひる雲ゆくらゆくらと舟
に寝て見つ

ほのぶくと山櫻戸のありあけに雉き子こなくこそ
す尾おより峯みねより

案内者あないしやの鳥啼あひきすぎし夕山ゆふやまに龍膽りんだう摘みて人た
そがれぬ

山茶花さんぢあなに朝雨あさあめかゝるおなじ扉とや中なかに里居さとみの妹いも
の名もがな

落椿^{おちつばき}おちかきなれる沓^{くつ}ぬぎに縁^{えん}の簀子^{すのこ}に陽炎^{かげろふ}
もゆる

炎上^{えんじやう}の内裏^{ないり}のがれし伶人^{れいじん}に白酒^{あろぎ}まゐる雛祭^{ひなまつり}か

な (母の雛のたゞ一つ火に残れるを)

いたいけやいさゝ菜の花^{なな}瓶^{かめ}にせば如月^{きさらぎ}寒^{さむ}の朝
をまからむ

はつ櫻曙^{あけ}をおぼめく江戸川^{えどがわ}や水も小橋^{こはし}もうす
霞^{かすみ}して

人は市に夏をわび居の小さき扉にまつはりて
來よ晝顔の花

袖笠に初名ぐれせし京の子の野菊摘む手に夕
あかりして

残月や古驛に入れば上つ代の垂氷のこれる藁
びさしかな

ゆきくるゝ紅葉の丘の古鐘樓小鹿よ鳴らせ入
相のかね

見かへれば人たがへせし白き鶯がの落葉おちちらし
て小徑こみちを水へ

里ずみの君が瀟洒せうさをよろしとて神のたまへる

花眞白百合

(友の初子あげしよろこびに)

椿つばきの葉はねり白酒しろの香かを盛りておどけ賣子うりこや京
のはつ春

人待つと小縁こえんの春のつれぐや花粉くわふんこぼして
黄きの蝶てつすぎぬ

牧の鈴振ればゆふ野の靄はれて羊ならぶよ入
日を背に

朝風はとほき青葉の丘こえてわが倚る窓の花
蔦こぼす

薔薇の日に伏目の君のそがひよりほそ椅子う
たば戀人めかむ

こすもすの花の灯影や胸像の詩人の頬にうす
紅して

梅もどき霜の小冠こみなぬぎてわれ見る稚兒ちごと
丘たかの朝日に

ほそ窓の薄紗うすぎぬ透すきて秋の花朝目あきめすゝしき人に
そよぎぬ

繪額えがくの間麗よき日ながれて水郷すゐきやうのへにすぞはゆ
る夾竹桃けふちくたうに

姫瑞樹片腕ひめみづきかたかひななる姫神ひめがみの蠟ろうの小肩こがたに黄きをこぼし
けり (草堂即事)

破芭蕉ふとのゆらぎにこほろぎの窓にあたり
し朝の寂びやう

はてつべう寂しき夜なり香焚きてなき人みな
の名を呼びてまし

夕ぐもり雨かと思れば遠丘のそらかきくらす
大榎むれ鳥

御手かけし孫かはゆさの秋袷おつけのまゝに
三年はすぎぬ (祖母の三週忌に)

桔梗ききやうそと朝あさの小萩こはぎにさきつ世よのわが戀人こひびとと露つゆ
こぼしけり

秋あきの日ひやおもひきえ入いる夕草ゆふぐさに人惆悵ちゆうぢやうの野のは
虫むしのこゑ

夏花なつはなの垣かきをそがひのやさ姿すがたふと見あけたり朝あさ
舟ふねにして

うらわかき村醫むらゐの妻つまが眼病めびやむ子むすこに冬ふゆばらかざ
す小春こはるの扉とかな

初夏はつなつの日かけ薔薇はらばらなす王宮わうきゆうに花束あなぎぬつくる青衣あなぎぬ
の人

夕寒ゆふさむうゆくて靄あやする牧の野にまよふ小牛こ牛か低
う鈴すずして(瑞西)

誰たが朝の思ふれてか沈ちん丁花ちやうげねたしや花のこぼ
れこぼるゝ

きよかりし花の一生ひとよの夕ぐれに落花らくわの中の君
を見るかな(友の姉なる人の身まかれるに)

井の頭辨財天の御衣更と水銹にひかる濃彩も
みぢ葉

あなかしこ地のみあらかは黄茅ぶき銀泥剥け
し穂薄ゆれて (二首、井の頭にて)

こすもすの花はあるじが歌の趣と人の苦吟を
笑むや宵の灯

七人の二人は京を遠き野に摘みて讃ぜむ菊日
和かな (白菊會三週年紀念の日)

懸額のせいぬべにすがものがたり窓帷透きて
薔薇の影しぬ

のころ燈や素焼のをとめ夢守りて花環つくり
し枕上かな

鳩よべばほろく啼きて白萩の夕ちるかげの
人に馴寄りぬ

温室の扉や眞紅艶てる常夏とむらさき草と添
ひて雪見る

清宵せいせうや仰あやげば月つきのかたくかたくに君きみがます座まと星ほし
の片照かたてる

秋あきやせてそとふむ音ねにも小兎こうとのおち葉見はみかへ
る榎林ならはやしかな

山菊やまぎくの白しろきにまじる吾木香われもかうわれも欲ほりしよ汝な
がさびしみを

一ひととせのわが詩うたのあとを見かへるに判者はんじやめか
して除夜ぢよやの鐘鳴かねる

小簾をすつれる朱あけの細紐ほそひもゆれぬふれぬ晝の小窓の
柱に人に

かへり咲きの櫻なまめくそよ風に野の丘をかめぐ
る陽炎かげろふも春

待宵まよひの花へのみうたなつかしき一もと植ゑし
薄月夜かな

はつ秋のあかき灯ひよせて妹いもうとが讀めばわが文興ぶんきう
なくもあらず (新女子書翰文をかきをへし夜)

小手こてまねく夕日の島へ獲物帆えものに興じてがへる
鯛釣たひつり小舟せうふね

燈臺のあけの灯ひそらせ白鳥しらどりのみだれてよりぬ
磯の樂堂いそがくだう

中津川薄日なかつがわうすびの秋の落鮎おちあゆともみぢそへたる君が
興かも

ゆふ時雨おち葉となりし宵寒よひさむは寒菊いけし人
の戀しき

孔雀草春の孔雀が驕り羽のはてよとさびし夏
かげにして

向日葵のかたぶく見れば君が世もわが世もた
ゝに光うするゝ

白き花摘みつゝゆけば夕ぐれのこの湖ぞひに
母ますらむか

香焚きて薬の香いとふ夕雨に人のなさけの木
犀の花

朝霜あさしもや若わから冬ふゆつばき二枝ふたえ剪きりて今日けふの御墓みはかど扉ひ
守もれといはまし

寒菊かんぎくの霜しもどけかをる朝あさの日に慈光じくわうまばゆき御み
墓はかぞ見みゆる (二首、師が三年の御忌に)

西にしぶりの彩繪いろえふりたるこの小鉢こはちうす紫むらさきの花植はなうゑ
てゑ見みむ

朝あさづく日薄うす紅梅こうばいの頬ほのいろと春はるの雪ゆきせしをと
めが家いへに

朝の野に點ずる紅の夏花を君が白裳に摺りて
ゆかまし

そとつけし小さき沓のあとながら門の石階に
春の雪して

白菊の花貝ふりし塗手箱をとめの母が歌秘め
よ永久に

紫陽花の歌かきさして君が座に君ますことも
宵の灯ふけぬ (かへりゆきし友へ)

花環疾くうなじにかけて鞭とりね羊の群に野
は夕迫る

冬ばらよ汝が淡き香に晝を病む清きやつれも

秘めね遠人(病める友への返しに)

紅椿雨にこぼるゝ女人塚信女大姉の名はふり
にけり

土産もみち君にかざせ燈影に透かして見れ
ば山姫のごと

仰ぎ見る眞晝野のそら高う澄みてわが目路遠
く秋の鳥ゆく

市の夜にふとえし甕の古色めでつれくな
らぬ草堂の雨

上つ毛の山の秋かぜ吹くからに吟聲さびし君
とおもふかな (朗吟會席上、晚村子へ)

ほそ障子端唄めきたるやさごゑに時雨笠して
鶯よりね (おなじく、湖友子へ)

寐そびれし裏の林のかし鳥よ落葉かづきてわ
がねざめ訪へ

すゝき野やゆふべに近き秋の日のきらめき薄
う雲流れゆく

霜ぐもりみぞるゝ垣の殘菊にひる餌乞ふとて
小鹿よ啼くか

汝を膝に汝が頭撫でつゝ夜々の長き苦吟は汝
のみ知りしよ
(手飼の猫のうせしを悲しみて)

病みぬればなまめく雨も皺枯の老女がこゑと
淋し春の夜

秋花はわが世に遠きうす闇のゆふ野さかりて
来しや草の扉

すがた繪の金髪剥げし花瓶に葉牡丹さすも阿
蘭陀ふりか

尖塔のひかりに君が杖のあととなつかしき見る
月夜村寺
(在米某畫家より贈られたる小品に)

木犀もぎせいは祖母おほはが袖そでのあまき香かほと慈顔あざなおぼゆる秋あき
明王院みやうわういん

ゑみわれし無花果いちぢやくの日の窓まどにきえてかけし拂ほろ
子すに秋の蚊あきまよふ

青楓林あおかへでなしたるふるやしる神鈴かみすず鳴らさば朝あさの
氣搖ゆれむ

かへり咲く菜花なはなや木曾きぞうの檜ひの笠かさや俳畫はいがわめきた
る君きみが臘月らふげつ

師をめぐり師の上うへ謳うたふ神も見し遠野萩むら霧
はれにけり (なき師をまのびて)

夏めきてをかしき鳥の囀さえずりにふる沼の蘆の日
はたゞ青き

小春日のひまもる杉のなめり道秋とや虫の音ね
もきこえつる

紅椿べにつばき一輪のせし小法師の小傘かさも見ゆる雨の寺てら
町まち

夏書げがきして墨のわろきをかこつ子に香かうはくゆら
ぬ經机きやうづくろかな

何鳥たどりか音ねもころくと竹叢たかむらを水車すゐしやのかたへゆ
く朝日和

榛原はりばらや入日に寒き乾反葉ひそりばのかさくと鳴りて小
笠がさを打つも

おどろしき雷かみよあらしよ秋草あきぐさに小雨こさめといは
うれしからむを (百花園にて)

秋めきて人戀しきのひる小雨桔梗若ら萩かさ
す子もがな

枕しては背戸のながれのいそがしう竹の根洗
ふ音にそはぬ歌

花畑の花をいたはる夕雨に誰そうしろより花
笠きせし

はちらひの少女か山の小兎は垣の小菊にそと
かくれつる

無花果いちぢやくや方丈ほうぢやうくらき秋雨あきさめにうた三昧さんまいの人香かうを
焚たく

裏山のほゝけ穂すゝき瓶かめにきりて後のちの月待つきつ
夕小縁ゆふこゑんかな

ゆく春をひとり夕野の石に踞まよして落花らくわ賦きすれ
ば鳥啼とりなきすぎぬ

山茶花さざんかの朝あをときめく垣かきの日につゝましげな
る小春連翹こはるれんけう

古伽藍剥けし壁畫の跡かけば白木蓮の花の香
ぞする

百合の扉に人の産屋は飾られて何の榮よぶ瑠
璃鳥の歌

菊植ゑておなじうれひの扉をとへる白衣の神
をふと垣間見し

ふれ雪と紅梅姫のくちずさみ降らばや春の兔
つくらむ

京雛に奈良人形のものおもひさくら薄日の繪
師が小机

萩すゝき野わきのあとの日のさびに祈りの香
や薄う窓はふ

墓徑は山査子さける露をぬり晝を虫やむわが
ふむごとに

鉦たゞき詠歌となへてみほとけと札所まゐり
の夜やまた更けし
(王父の裏にこもれる晩村子へ)

秋遠くそびゆる塔に野は晴れて菊の日ぬるし
小鹿の群むれに

春雨や乾飯ほしひやると縁えんの人鳥屋とやの鶏とりよぶこゑ細
うして

風邪かぜこゑの秋の灯ひをもる小萩こはぎ越し溝川みぞがはぞひの
根岸はくれて

さび竹の小籃こかごに露つゆの無花果むらぎや朝あさの俳味はいみはさて
舌したに淡あはき
(無花果をおくられて)

幔幕まんまくに日蘿ひかげめぐらす大廣間おほひろま加茂かものの御生みあらと筆ひら筆りき
のして

豊秋とよあきの新嘗にひなめまつり午ひるすぎて櫻さくらもみちの里日さとひ和
かな

舞部屋まひべに舞装まひよそひする姉あねのひまを紅梅べにうめゑがく銀ぎん
の小扇こあふぎ

投げ入れの水仙すいせんさむうおもやせし夕霧ゆきりもがな

戀こひの吉田屋きちだや (さる畫家へ)

かへり遅きわが釣舟に灯影しぬわれ待つ人か
島の燈臺

足もとに紫陽花さきて青海の白波あがる崖の
掛茶屋

小春日や御堂の縁にむしろして法衣つくろふ
山の徳

沈丁花春を閑居の窓越しに薄日うけたる茶人
ぶりかな

朝萩あさはぎのふとのみだれに待宵まちよひの花への歌を扉とに
うしなひぬ

冷えまさる胸のいたみに手をあて、きけば夜
の雁かりきえ入る如き(病中)

ゆけどく花真白ましろなる躑躅つじ野のや空には白き雲
も流れて

白菊會詠草

金
扇

佐
瀨
蘭
舟

落葉松かちまつや山毛櫸やまけに直黄ひたぎの峯みねいく重南へへ落つる
秋あきわたり鳥どり

この雨の葉月はづきに入らば眞萩まはぎさく裏うらのあれ野に
鹽たらひうかへむ

うす霞ほそ丹をひく春の山塗の色して若狭
は明けぬ

山吹の小さき折戸に蛾を飼ひて種子紙つくる
更科の里

稗酒は五してくめ野守等が蜂兒まると伊那
の蓼垣

草野ゆけば夏川かれて眼のかぎり紅の波よる
晝顔の花

東女あづまめも利久りきうも宇治の夜あけ舟河かほ水みづたて、茶ぞ
汲ひみにける

平陽へいやうの任にもなごりの芥子けし畑はたに白馬しろつなく朝が
すみかな

世の秋をひとりあつめて銀杏ぎんぎよう葉はの風かぜにまかせ
し金きんの小扇こあふぎ

葭よもぎの根ねのひとよをぬきてよしとりの翁おきながこめ
し螢ほたる姫ひめ宮みや

あけ月つきや霜しも雞頭けいとうの露つゆの香かほに十壺じゅうの紅べには志こころぼり
てましを

少女等しょうにょらうが筑紫つくしなまりのひな唄うたに網あみすく磯いそのう
すみぞれかな

草くさながう路みち白河しらかはの花はなあざみあざみ女行脚をんなあんぎやくに春はるのもや
する

髪かみにさせば瓔珞えいらくながき金雀枝えんしやくのみどりにつど
ふ金きんの胡蝶こてつや

朝名ぐれ竹のまがきに紅よせて芙蓉の花をそ
と結はせけり

ゆく春を李氏がうまいや白茶地の衣名づ名づ
と山吹うつも

流れ藻のながれのまゝに花さきぬいづこをは
ての春の野の水

夕靄に森かげあはき尊菜沼狐御寮の列ふとい
でぬ

笙とれば若づれ花藤あめおびて衣にぞかゝる

奈良の伶人

夕ぐれは姫ひまはりぞいたいけの金の小手毬
星にあづけぬ

待宵の花さく中に笛とりてそよめきいでし春
の夕月

榎子背に組糸ぶりや小妹が蘭の長さにつゞり
て解くも

白河に古^{ふる}りし春かぜ花すぎて若駒づれの女馬^{をんなま}
子吹^こく

あさ露におもひ若^{わか}なえて紅穂^{べにほ}蓼菊^{たで}の小肩^{をがた}をそ
とすべりたり

魂棚^{たまだな}にあけのともしやなき妹^{いも}が笑^{えみ}の香のころ
酸漿^{ほづき}の紅^{べに}

祖母^{はば}が越^こすなさけ色よき麻^{あさ}の葉の一つ身丈^{みだけ}や
山藤の花

天つどふ如來のさまや夕雲に百人誦する向日
葵の花

松をちこち花草にほふ清澄や土佐が繪様の朝
牧野かな

南天の珠數まく稚兒にさまされて丁子見に来
しおくつき所 (うせし弟を志のびて)

待宵草

田波御白

春かぜに松浦まつらの石の夢とけて姫ともならむ潮うしほ
ぐもりかな

山やまに生おひて風に尾花のさやぐ野を話かたにきゝし
海かとぞ見る

野菊さく方へと道は教へつゝ、か蘭がさ笠あむなる吉き
備び少女をとめかな

夕やみに迎ひの歌をさゝやきて月の姫宮待まつ宵よひ
の花

春の夜や枕は伊勢の繪卷物むかし男の夢から
ばやな

何神か天あめよりなげしかたちして芒に入りしむ
ら小鳥かな

この願ねがひかなはゞ花よ紅あかう咲けと土つちをきせたる
秋草のたね

海棠の若づくあつめてうぐひすの晝湯まるら
む春雨の縁

師に別れ友にわかれて何ゆるゑに一人越ゆべき
吉備の中山

故郷ふるさとはふりにけらしな扉とに倚よりて歸りを笑わらま
む母も在いまさず

珠たまの宮貝みやがひの御殿みどのにあふれたる春の氣ゆれてか
すむ海原

かぐはしき若芽ひめたる野の草のみなぎる氣
息いきに春や生れし

霜しもばしら氷柱つらたてなめ殿とのづくり冬ふゆの御神みかみは封
じてましを

故郷ふるさとにそむきて吉備きびの秋あきなればわすれて母を
戀こひふる日もあり

香かにはこる千草の中にひそみつゝ春くりかへ
す小田巻の花

撫子貝

土岐湖友

焚きすてし魚燈のかずや磯山にさくら祭の夜
はあけそめぬ

朝窓に寢覺まつ間をひとり見る蘆の芽ごしの
白魚汲むさま

型成りぬ美き頬に流す石膏は紅梅まぜて春の
日融かむ

牧草に搾りならべし乳桶の白きにうかぶ春の
朝雲

神の燭やまとるあまれる扉の群は雪に影しぬ
宵くりすます

針ぬけて集めし蝶の飛ぶと見は夢を博士よ君
に祝はむ

夏花^{なつばな}に薄月^{うすつき}ゆらぐ扉^{かど}は誰^たが扉^{かど}うた人^{ひと}ならば歌
告^つげて見^みむ

君^{きみ}すゑてわが漕^こぐ舟^{ふね}は濱^{はま}菊^{きく}の白^{しろ}きにかざれ海^{うみ}
鳥^{とり}のごと

秋^{あき}の日は木^き々の葉^は裏^{うら}と葉^は表^{おもて}とゆらぎ亂^{みだ}るゝ影^{かげ}
に暮^{くれ}れにけり

細^{ほそ}扉^{かど}もるやさこゑゆかしちる花^{はな}に叩^{たた}かで過^すぎ
む春^{はる}の夜^よの家^{いへ}

遠千潟舟にのこりて乳母と見ぬ君へ花藻を環
に編みつゝも

野櫻にかけ來し草の落ち鏡美き主ならばゆき
て教へむ

春雨に灯かけ美き夜や君は今われへの文を書
きつゝあらむ

君が扉の寢覺を過ぎる美き子らに香油とかを
れ春の朝雨

小草履や待つ灯の君が牡蠣舟へ河原いそげば
啼く千鳥かな

磯山にかはらぬ海の音きゝて昔の人と切る松
の葉よ

うす月のかすむ遠さや圓山も二つ櫓も夜ざく
らの上

園守よ孵りし雛は眞白羽か鳩の巢にちる朝ざ
くら花

春の夜や小さき怒をうつされておとなしう寝
つ妹なれば

ほゝゑめばやさ眉すこしよる癖も君にうつく
し春の燭ともしび

ほのぶくと磯の夜あけて透垣すいげんの夏花ごしに涼

しきよ潮(以下四首、海のほとりにて)

海の香かの残るみ夢に泌みませと朝々あさ早う戸は
繰らせけり

磯山や蟹が遠目に一步ひとあしはおくる、やうに撫子
摘みて

昇る日に朝磯かへるうすもの、袖笠かろう透す
くや黒髪

紅梅笠

平井晚村

松毬まつかきに御肩みかたうたれむ召ましませと麓ふもとの媪おばに笠賣かさうり
られけり

山寺やまでらへ灸乞やいとひゆく道みちづれを馬子うまこに取とられてき
く春の鐘

蟬こぼろぎのひげの長夜ながよの灯ひはふけて葛くず挽ひく人の唄うたね
むげなり

僧庵そうあんや俳はいの座ざはて、露つゆの井いに茶釜ちかあらへば月
いざよひぬ

水汲みづくみむと舟ふねをよせたる秋風あきかぜの淡路あはぢは晝ひるもうつ
砧いしづなかな

みだれふす胡蝶こてふの床とことふみかねて銀杏いんげいちる野
は黄昏たそがれにけり

出雲路や如月さむき神垣の梅にむすべる戀文
も見し

母のせて温泉へ曳けば白駒のたて髪ぬるゝ小
野の朝霧

撞く人は誰そやゆふへの若王寺竹にこもりて
鐘のきこゆる

霧ふれば柩車も衣笠もけふれるさまに見る鳥
部山

心のみせかるゝ旅のならばしを啼かでも過ぎ
よ笠の上の雁かり

辻占つちうらの灯ほかけ小ちひさき曾根崎そねざきに紙衣男かみこをとこがうつ砧いしづ
かな

燕つばめ來きてとつぎの衣きぬぞいそがるゝ迎へ舟待ふねまちつ女によ
護ごの鳥姫とりひめ

狂言きやうげんのうはさも壬生みぶの里吹ぶいて木この芽めほぐせ
し春の山かせ

ちる花にかざす扇の假名書を人に讀まれしさ
くら舟かな

猿さる也ひきも老おいぬる冬の津の國は賣らるゝ猿の簀
にふる雨

ほこらしう孔雀がつくる虹にじの輪わにまかれし戀
の落椿おちつばきかな

山鳥やまどりの夢おぼろめく小屏風をへだてゝ乳母うははと
春惜しみけり

早さわ蕨わづらひのほぐれもはてぬ朝あさの湯ゆに越こゆべき山の
影かげもくむかな

鳩はとがつく鐘かねかや朝あさの雪ゆき洞ほらに恨うらみちひさき君きみとお
もひし

秋あきの山やま遠とほ音ねに鹿かの啼なく宵よと硯い借かりたる觀くわん音のん寺じ
かな

うら山やまは木こ賊とく刈さられて小こ兔うさぎの耳みみとも見えみえず片かた
われの月つき

母の忌や順禮呼びていさゝかの茶粥してやる
春寒の朝

いやはての光まとひし向日葵の傾くごときこ
の別れかな（祖父を失ひて）

白 鷺

吉植愛劍

尖塔せんたふはいま灯とともりぬ浮彫うきほりの天女てんによの群むれに片あ
かりして

朝扉あさどみな花草つゝる湖うみぞひの小家こいへつゝきや鶯
も飼ひてまし

あやまりて斧を入るゝにたらし乳のちみてさ
びしき秋の無花果

淡雪のあとを名はしの小夜小雨いさゝか春の
音をまじへたり

榆林わか芽ふくなる三月は遠野の雲の青うか
すみて

窓おせばうす紅させる蔓草の花のまうへに美
き秋の富士

若めやかにせまる草野のさびしみをはみては
啼くに似たりこぼろぎ蟋蟀

根なし雲かたちばかりの紅くれなるに入日つめたき水
いろの空

あたゝかき春の流れはおとづれぬ冷つめたき夢は
とけよ櫛の實

朝日うけて羽の彩あやよき蝶あまたもつれて春の
風にうかびぬ

木枯にをのゝきたりし野の夢の名残ゆらぐに
たつや陽炎

花はみな小さくましろき蔓草にくもり日薄う
野は黄昏るゝ

うす絹のとばりすかして春の雪にあけし丘へ
の君が家見る

瓊

珞

岡

稻

里

かゝる宵天華の露やゑたゝらむ卯月八日のう

す月の空

雨まじり花もこぼれてゑづかなる朝扉たゝか
ば美き夢いなむ

夜の宮の星の瓔珞珠ゆれてたけなはなりや秋
風の樂

あけぼのゝ夢ともならで残りたる湖のあなた
の根なし浮雲

天の原夜露やまげき月姫が今宵もめさす薄ぎ
ぬの笠

夕空の秋めきたてる雲をもれて何のけはひぞ
草に入る聲

岡崎に虫きく宵の竹縁きせんや萩垣越しの秋の灯ひも
よき

やはらかき朝の新葉あはの美よき夢をゆすりて過ぐ
る初夏はつなつの風

織女たなはたが五色ごしきの糸の糸巻にうつくし秋はくり返
されぬ

常陸野のうらわか草に枕して寝ざめに見たる
春の筑波嶺つくはね

春もまだ若き調あらくのつゝましう草にひそみてゆ
くや野の水

靄の中に小さき菩薩は消えましぬ残る御座みくらか
白蓮しらばすの花

くだちゆく夜をいねがてにつれぐと竹の雨
きく北嵯峨の宿

裏畑の麥のわか葉の夕風に吹かれてかへる雞とり
の一むれ

春姫がのべし霞のうす絹に美⁺き繪となりし山
よ流よ

鶯
菜

武山英子

春の風かぜさくら吹雪ふゆきの幕引きて市女いちめ笠がさする人へ
だてけり

姉君の鬘まげの手て絡がらの濃こむらさき品あなよき色いろにさく
あやめかな

つりあげし網燈籠の灯ぞ紅き來世は母よ長谷
の御佛

緋袂紗やわびては里の爐の縁を錆びし茶の間
と虫さく夜かな

御髮梳けば軒の白梅こぼれきてみゑりに消え
ぬ淡雪のごと

里月夜馬に緋ぶさや鈴かざり紙雛めきし花嫁
の君

ふれよ雪鹿の斑花と見ゆるほど野守が笠の重
からぬまで

さだすぎし姫がゆふへの薄化粧うつる鏡と澄
む後の月

昂熱や白藻にまかれこの夜たゞたゞよふ水の
寒流もがな(病の床にて)

蔓花は罪やゝちりし女人めきひけばもつるゝ
森のうすれ日

結綿むすわたや娘いとしの親ごゝろ鬘まげかきてやる秋祭あきまつり
かな

紅林檎べにりんごあまり濃彩こゝろと薄葉うすえに包つみて人の朝寐あさい揺ゆ
らまし

君とゆくに人かへりみる下京しもきやうやうすものほし
う宵月よひつきのして

湯あがりのかたちつくろふ夕ゆふかゝみ對つらみの浴衣ゆかた
や桔梗ききやう白萩しろはぎ

町住^{まちずみ}や人のなさけの花束^{はなむく}に野^のの趣^{おもむ}うれしむ秋
の小燈^{ことう}

なき人のみ歌のさまと白芙蓉^{はくふよう}つぼみの中に香^{かう}
焚^たきこめぬ

たどります野は花の香^かや鳥が音^ねや浄土^{じやうど}の光お
もかけにして

香箱^{かうばう}に御手^{みて}あとのこる折鶴^{おりつる}やむかしは在^ましき
春のおん母

あなかしこ御託みづけに秘めし金の鷲うしあらぬ袂たもとに神
がくれせり

若わひられて瓔珞えいらく重おもき大廣間おほひろまおもはぬ人につ
みうたれし

緋鹿ひかの子こに鬚まげうつくしきあで姿すがたお七ななかあらぬ

春の寺町はるのてらまち

くれなるの禊たすきのあやに戀こひ若わりて早苗さなへとる手の
このごろ重おもき

あら絹ぎぬに眉根まゆねおほひて笑わらみかけぬまとるくづ
れし薄花うすはな月に

朝雨あさあめや笠かさのうちなるこゑの主見かみたさに買かひし
鶯菜うぐいすなかな

—(をはり)—

明治三十九年四月五日印刷
明治三十九年四月十日發行

定價金四拾五錢

著作者 金子雄太郎

發行者 瀨木博尚

印刷者 長谷川辰二郎

複製を許さず

發行所

東京神田區
千代田町貳番地

短歌研究會

東京神田區錦町三丁目一番地

金子薫園先生指導誘掖新派

和歌の研究會は起り。現時の和歌壇上

來り會せよ。清楚温藉の詩風を喜ぶ人々は争うて

附を求めらるべし。詳細の會規は往復端書を以て送

東京神田區
千代田町貳番地

短歌研究會

